

公募研究 A03 (課題番号:09202204)

近世・近代沖縄の集落移動における立地選定とその空間形成の情報化

研究代表者：渋谷鎮明・中部大学・国際関係学部・助教授

1. 研究項目：A03 環シナ海地域間交流史

2. 研究課題名：近世・近代沖縄の集落移動における立地選定とその空間形成の情報化
(課題番号：09202204)

3. 研究期間：平成9年度(1997)

4. 交付研究費：平成9年度 1,300千円

5. 研究組織(氏名：所属機関・部局・職)

(研究代表者) 渋谷 鎮明：中部大学・国際関係学部・助教授

(研究分担者) 浦山 隆一：香川職業能力開発短期大学校・助教授

当初、研究代表者は齊木崇人(神戸芸術工科大学芸術工学部・教授)であったが、本年度9月より一年間海外留学をすることが急遽決定したため、科学研究費の規定に従い代表者を渋谷に変更し、齊木は研究協力者として参加することとなった。

6. 研究目的

本研究のメンバーはこれまで、韓国・台湾・中国など東アジア各地の集落について比較研究を進めてきたが、そこから沖縄の独特の文化を背景に形成された集落空間・住居の重要性を認識するに至った。とりわけ、沖縄の集落に関連する研究において、近世・近代の集落移動に関する研究・資料・事例が他地域より豊富である点、また近代に行なわれた集落移動の事例が存在する点について注目し、この集落移動に関する研究が、移動以前の集落の持つ立地や空間の特性、人々の環境・空間観が移動後にいかに引き継がれるかが明らかにされるという点で非常に重要であると考えた。また東アジアで集落や住居の空間構成に多大な影響を及ぼした風水地理説が沖縄の集落移動にも微妙に影を落としていることが、近年発見された『北木山風水記』などからも明らかになっており、この沖縄の集落移動研究は東アジアの風水研究に新たな視点を与えるものであるとも考えられる。

このような背景から本研究では、

- (1)資料の豊富な八重山地域を中心とした集落移動の事例を各種の歴史資料を中心としながら整理し、近世琉球から近代にいたる時期の集落移動の全体像をとらえ、

(2)そこで得られた全体像を基礎としながら近世・近代に移動の行なわれた集落を事例として集中的な現地調査を行ない、移動の実態と旧集落の復元をミクロスケールで明らかにすることを通して、移動前・移動後の集落の空間構成を比較し、空間の特性、ひいては空間観・環境観がいかに変容したか、あるいは引き継がれたかを明らかにする。

7. 研究実施計画

八重山地域を中心とした各種歴史資料を収集・検討し、集落移動の行なわれた集落とその位置を把握し、それを基礎として現在・過去の地研図・絵図などを参考に、移動前・移動後の集落の立地選定・集落の空間形成プロセスなどについて可能な限り比較を行ない、空間の特性、空間観・環境観がいかに関引き継がれたかについて明らかにする。このようなインドアワークを踏まえ、移動の歴史の新しい集落、あるいは近世の集落移動が把握可能な集落を選定し、集落形態・地割などの現地踏査、インタビュー調査などを行ない、当該集落への住宅の移動と、旧集落の復元をミクロスケールで行なう。

8. 研究経過

まず6月に研究分担者である浦山が沖縄本島、石垣島にて集落移動に関する予備的な文献収集を行ない、特に石垣では歴史資料・民俗調査報告書などが多数存在し、それらが既に文献目録として刊行されており、また移動前後の状況を知るために重要な絵地図などが石垣市史編集室などにおいてかなり把握されつつあることが確認された。

7月31日～8月10日には、渋谷・浦山・齊木(研究協力者)が石垣島・西表島にて資料収集および現地調査を実施した。調査では、まず近代(明治～大正期)に集落移動が行なわれた西表島祖納集落において、それまでに収集した各種歴史資料などを参考にしつつインタビュー調査を行ない、旧集落の姿を復元し、さらに旧集落から現集落への住居の移動について詳細に把握した。次に、近世に集落移動が行なわれ、その後廃村となっている石垣島安良集落について、石垣市史編集室の協力をうけて現地調査を行ない、各種歴史資料と『北木山風水記』を参考にしつつ、礎石・石垣が残存している住居跡の実測調査を行ない、移動後の集落を一部復元した。

さらに12月5日～10日にかけて補足調査を行ない、特に石垣島安良集落において、移動前の集落の位置について確認し、夏に調査を行なった移動後の集落の復元についてさらなる調査を行なった。

また7月18～19日には神戸芸術工科大学にて研究打ち合わせ会議を開催し、現地調査の準備を行ない、さらに11月19～21日には香川職業能力開発短期大学校にて補足調査の準備と総括班報告書作成のための打ち合わせを行なった。

9. 研究成果の概要

八重山地域の概要 本研究が主たる研究対象地とした八重山諸島は、沖縄本島の南西400kmに位置し、石垣島より与那国島までの大小19の島々を指す。現在の呼称では沖縄県に属する島々は「琉球列島」、また宮古・八重山をあわせて「先島諸島」とされるが、八重山地域の住民の認識では沖縄・宮古・八重山という三地域に区別されている。八重山の各島の自然環境と集落を中心とした生活を規定してきた大きな要因として、地形・地質的な特性があげられる。目崎(1988)の地形分類によると、八重山の島々は隆起珊瑚礁や珊瑚礁に起因する石灰岩地層に覆われ、水に乏しく、標高が低く平坦な「低島」

と隆起運動によって形成され、砂岩・頁岩に覆われ、標高が高い「高島」に分類される。このような地形・地質の差は、河川や地下水の状況に影響し、ひいては各島の生活に反映されてきた。例えば本研究で扱う西表島は高島に分類され、水が豊富で水田耕作が可能であり、その反面集落移動の一因ともなるマラリアの発生しやすい状況でもあった。また山林も多くかつては木材の重要な供給地であった。逆に低島は水が乏しく畑地や牧草場が卓越するのが一般的である。

八重山地域における集落移動 本研究が主題とする集落移動は、様々な要因によって行なわれているが、近世八重山においては、マラリアの蔓延、明和の大津波（1771年）などが主たる契機となっている。またそれにとともに、政策的な意図をもった寄百姓（強制移住）が繰り返し行なわれ、八重山の歴史や集落の形成と空間構成を捉える上で重要な事項となっている。近代においても、廃藩置県後住居移転の自由が認められるなどして、移住・入植などが行なわれてきた。

近世における集落移動の契機としては、高島で水が豊富な石垣・西表などでのマラリアの流行がまずあげられ、そのため集落自体は低地から水の便の悪い高乾地に移動し、人口が減少した集落には他の地域より強制移住が行なわれた。次に明和の大津波も移動の契機として重要であった。このときには石垣島を中心とした海沿いの集落に大きな人的・物的被害があり、そのため他の場所に集落が再建され、結果的に集落移動が起こっている。

また八重山における集落移動には、風水説の関与も予想される。たとえば石垣の集落などでは風水が悪いとの理由で近距離の移動が行なわれたり、また1864年に与那国を除く八重山のほとんどの集落の風水判断が記された『北木山風水記』などには、風水が悪いために移動すべきであるとの判断が記された集落（石垣島屋名蔵、伊原間、後間、安良など）も多く、そこには新たに作るべき集落の場所や坐向などが詳細に記されており、これらの風水資料をも視野に入れるべきであろう。

調査集落の選定と特性 以上のような八重山における集落移動については、かなりの量の研究が蓄積されているが、集落移動が実際にどのように行なわれたのかを、移動前・後の集落の空間構成を復元・把握した上で、移動の実態や空間形成について明らかにしたものは非常に少ないと考えられる。そこで本研究では、まず近代（明治～大正期）になって住居移動が行なわれたため絵図・地籍図などの資料が活用でき、当時の居住者にインタビュー調査が可能であり、移動そのもの実態が詳細に調査できる西表島祖納村と、近世末に移動が行なわれ、移動後の集落が廃村となったため、移動後の集落が詳細に復元できる石垣島安良村について現地調査を行なうこととし、この2集落の詳細な調査を通して八重山における集落移動の実態と、人々の環境・空間観が集落移動に際してどのように変容、あるいは引き継がれるのかについてアプローチを試みた。

祖納集落の調査概要と分析 祖納村は、西表島西海岸の海に突出した半島の根元部分に位置し、人口は182人、80世帯ほど（1996年現在）の集落である。村は「ウィームラ（上村）」と呼ばれる標高30mほどの小山と西側の祖納岳（標高293.3m）の間に挟まれた標高2～5mほどの比較的平坦な場所に立地している。この村は、明治～大正期にウィームラから現在の位置に移動が行われたことが知られているが、旧集落には現在も石垣などが残り、その痕跡が確認できる。またその移動の時期を経験した住民が存命であるため、移動の実態について詳細に把握することが可能である。

その当時の村の様子については温故学会所蔵の2点の地図（明治20年頃）と明治35年作成の地籍図から知ることが可能であり、また1863～64年に記された『北木山風水記』からも一部その姿をうかがうことができる。それによるとすでに1863年頃には現在の村の位置に番所を中心とする村が存在し、

旧集落からの移動が比較的ゆっくりと行われたことが確認できる。

今回の調査では旧集落に残る石垣などの痕跡を実地踏査により地籍図上に記録し、その一方でインタビュー調査から新旧集落の屋号、分家関係、および旧集落から現集落への移動の位置関係、さらには一部の居住者の血縁関係を把握することに主眼をおいた。

その結果、第一に、旧集落の復元については、明治35年の地籍図で旧集落に宅地として記載されたほとんどの地筆について屋号と分家関係が把握され、自らの家系に関する御嶽を背後として前方へと分家が行われたことが明らかになった。またインタビュー調査により旧集落の一部の姿が復元された。第二に、旧集落から現集落への移動については、明治35年の地籍図にあった家々が現集落のどこへ移動したかがほぼ明らかになり、移動先は「ピサダ」と呼ばれた当時の水田を埋め立てた場所、および自らの関係する御嶽を背後とする比較的標高の高い場所が中心であったことが確認できた。第三に現集落の空間形成については、一部の家系について分家関係が確認でき、そこから一般的に南ないし南東側であるメー（前）の方向へと分家が行われていることが明らかになった。

これらの結果から、移動前の御嶽を背後として分家をして集落が形成されるという原則が、移動後にも一部引き継がれていることが想定される。すなわち移動前には御嶽（後） 本家 分家（前）という空間認識が地形的にみても上 下という方向性として認識されていたが、移動後、地形が複雑な場所に移ったため上 下、および背後に御嶽を持つという空間認識が行いにくくなったため、北ないし北西方向をクシ（後）としてメー（前）の方向へ分家が行われるようになったということである。したがって本家（後） 分家（前）という原則のみが引き継がれてきたものと考えられる。安良集落の調査概要と分析 廃村・安良村は石垣島において唯一、集落移動に関する具体的痕跡が残された村である。明治26年の笹森儀助著『南嶼探検』は、平久保村の枝村で戸数6・人口19（男8・女11）と記す。その村の様子は温故学会が所蔵する2点の「平久保村之内安良村全図」及び「平久保之内安良村」の絵図から知ることができる。また1863～64年当時の沖縄八重山地方47集落等の風水吉凶判断記録である『北木山風水記』の記述から、この村の成立は風水判断後に「可移居之地」として指定された場所に建立された村であることが確認された。

今回の調査では、御嶽・井戸跡・村落構成要素である道・敷地・前城（ヒンプン）・石垣などの全体像、ならびに敷地所有者確認を行なうとともにヒアリングにおいて敷地内の建物配置及び建物内部の室構成の概略を記録した。さらに、建築的調査としては、浜崎伊佐郎の敷地測量と建物の礎石の実測を行ない、今後の建物復元の基本資料となる図面作成を行なった。その結果、建物の方位坐向より『北木山風水記』の吉凶判断に基づいて母屋（ウフヤ）を「坐丑向未」として、門口を未方に定めている。さらに竈のあるトラヤは戌乾亥方に配置し、カワヤを壬癸の方向に置いている。これらの点から1864年以後に成立した廃村・安良村は風水による村建てがなされたと考えられる。

それ以前の移動前の村の様子については『北木山風水記』の記述ならびに、明和の大津波直後の村の再建の記録である「大波之時各村之形行書」（1771年）から、津波前の村の場所ならびに津波後の再建された村の場所や規模を知ることができる。この点については、現在の2500分の1地形図および明治35年の地籍図を重ね合せたうえで、文献から読み取れる寸法（距離）方位、伝承による旧御嶽の位置から地図上での作業を行ない、その移動の方向から、津波前の村が津波後70m近く山側に移動し、高山の近くの風水上良くない場所に村建てをした様子、さらには1864年以後に再度、移動した事実を確認することができた。今後は、廃村安良村の全体測量図に基づいて、二度の移動によって成立

した安良村の全体像を把握する予定である。

主要研究業績

齊木 崇人・渋谷 鎮明・浦山 隆一ほか「西表島・祖納集落の立地と空間構成 - 東アジアの集落・居住空間研究 19~24」(日本建築学会『学術講演梗概集』E-2、1997年9月、p.511~522)

渋谷 鎮明「朝鮮(李朝)時代末期郡縣図の表現方法にみる風水地理的地形認識」(『歴史地理学』39-3、1997年6月、p.25~38)

崔昌祚(渋谷鎮明・金在浩訳・三浦国雄監訳)『韓国の風水思想』、人文書院、1997年10月)